B 150　被服の色彩嗜好とマテリアルとの関係（第4報）

東京家政学院短大　○今井弥生　高野美栄　井沢尚子
東京家政大学　木曽山かね　中小企業大学　志満津孝司

目的　色彩・意匠学部会の調査研究グループは、引続き都内ならびに近隣から通学する学生が、被服構成ワンピース・ドレス製作実習に際し、秋・冬物を対象に各自が最も着用したいスタイルに適した生地を購入、製作させ、その色彩嗜好、マテリアルと'82～'84年のファッション情報を分析、検討し、被服造形のための基礎資料とする。

方法　1）対象　東京家政学院短大　家政科学生　127名（'82年40名、'83年87名）、年齢18～19歳、2）生地購入時期　'82年10月、'83年10月　3）検討　素材生地の鑑別

日立自記分光光度計で測色、色調と素材、スタイル傾向、'82～'84年のファッション環境について調査した。

結果　学生の選んだ生地素材は、秋、冬物であるので羊毛が殆どであった。'82年は無地を染色した後染が多いが、'83年は先染による色相を表現した生地が多く選ばれた。これは高級化嗜好の素材の現れと考えられる。

色相は'82年に選ばれた黄系に代って赤系が増加すると共に新しい傾向として取上げられている。色相の変動は、'83年では赤紫系、青系は減少し、青紫系、黄赤系、灰系は増加している。シルエットは、'80年代でVネック、タイト・スリーブ、タイト・スカートが30%を占めていたが、'82年は全くない。代ってラウンド・ネック、スリーブは同様、セミタイト・スカートが20%となり、'83年は7%に減少する。'83年ネックは同様、パフ・スリーブ、ギャザード・スカートが20%となり、堅実な側面とファッション情報によって徐々に変化することが明らかとなった。